青少年地域活動ふるさとを見なおそう　第2集『長門昔ばなし』より

清水坂の狐

大門川と和田川がいっしょになると依田川になります。このあたりにひとりのおじいさんが住んでいました。おじいさんは魚取りの名人で、きれいで冷めたい水によくそだつ岩魚を捕るのが大好きで網打ちや釣りにたびたび出かけました。

小雨がしょぼしょぼと降る日でしたが、夜になるのを待って今日も大門川の上流に向かって網打ちにでかけました。長年の経験で、その日はおもしろいように魚が捕れました。

網を打つたびに魚が捕れるのでおじいさんはときのたつのもわすれて漁を続けました。三キロメートルほど上流の入大門という部落のあるところにきたときは、午前一時になっていました。

「今日は大漁だったし、ぼつぼつ帰ろう。」と網をたたんで大門街道にでると、家の方角に向かっていそぎました。おじいさんは暗い夜でも大門川や大門街道は毎日あるいていますから、自分の家の庭のようによく知っていて、道に迷うようなことはありませんでした。

入大門の部落を過ぎると隣りの窪城（くぼき）部落までは一キロメートルばかりあります。この部落と部落の間には「清水の坂」という坂がありました。むかしの清水の坂は急な坂道で道の巾もせまく、うっそうとした木々が繁り、ひるでもうす暗くたまたま古狐が出ぼつし、人が化かされるいやなところでした。

ある人は暗くなってここを通り家に帰ると、いつのまにか、すっぱだかにされ、フンドシひとつになっていた。ほかの人は、入大門の親戚にぼた餅を届けに行ったら、重箱の中の餅は馬の糞に変わっていたり、油揚げや稲荷ずしもたまたまさらわれるなど、うわさの多い場所でした。

その夜は小雨が降り、うす気味悪く、なんとなくいやな予感がしました。おじいさんはいそいで通り抜けようとしました。ところがふしぎなことにおじいさんが帰ろうとする道がスーとやみの中に吸いこまれるように消えて、帰る道がなくなってしまいました。

そして、生ぬるい風がサーと吹き抜けて、繁った木々の葉がざわめき、小雨の露をたっぷり含んだ木の葉から落ちる雨の音に、おじいさんは両手で耳をおおいたい程のおそろしい気持ちになりました。

「はてな・・・・狐の仕業(しわざ)かもしんねえぞ。」

おじいさんは、とっさにこんなことを考え腰にさしていた、たばこ入れを取り出し、道ばたに腰をおろし一服つけながら、自分のあせる心をおさえ、「この古狐め。悪さばっかりしやあがって。この網で生捕りにしてくれるわ。」とばかり、ざわめく木立の下をじっとにらみつけました。

すると不思議なことに、今まで消えてしまって見えなかった道がポーとかすんで見えてきました。「古狐め。俺の気力に圧倒されて逃げ出しやがった。」と思いこみ、そのまま家路を急ぎました。

ようやく家にたどりついた頃は、すでに東の空はしらみはじめていました。無事に家に着くと、急に疲れがどっと出て、ねむくなってきました。道具を土間に投げだし、なにはともあれ、ひと眠りすることにしました。

ひと眠りしたおじいさんは、いろりに火をいれ大漁だった魚を料理しようと思い、包丁を取り出し、土間に置いてあった、びくに手をかけたおじいさんは、思わず「あっ。」と驚きの声をあげました。

ずっしりと重いはずのびくは軽々で、びくの中には一匹の魚も入っていませんでした。戸にかぎを掛けてねたから、猫に取られるはずはありません。どう考えても、狐に魚を取られたとしか考えられませんでした。

それ以来、おじいさんの腹の虫はどうしても治まりません。夜網（よあみ）に出るたびことに「清水の坂」を通りましたので、今度こそ狐を捕まえようと気をつけていましたが、古狐はついにおじいさんの前には再び現れませんでした。